

# 貞観津波

2011年4月 古史庵淡伯記

## 一、原文

三代実録（日本紀略、類聚国史二七一）の貞観十一年五月二六日（西暦八六九年七月一三日）の記録に、注目す べき災害の発生が記されています。

「廿六日癸未。陸奥国地大震動。流光如晝隱映。頃之。人民叫呼。伏不能起。或屋仆壓死。或地裂埋殮。馬 牛駭奔。或相昇踏。城郭倉庫。門櫓墻壁。頽落顛覆。不知其數。海嘯哮吼。聲似雷霆。驚濤涌潮。洊徊漲長。忽至城下。去海數千百里。浩々不辨其涯俟矣。原野道路。惣為滄溟。乗船不遑。登山難及。溺死者 千許。資産苗稼。殆無子遺焉。」

※ この字は違の間違い。

※ 他書には「数十百里」ともあり。

## 二、読み下し文

廿六日癸未。陸奥国の地は大震動し、流光は昼の如く隠映す。頃之、人民は叫呼し、伏して起きる能はず。或は屋仆れて圧死し、或は地裂けて埋もれ殮れ、馬牛は駭き奔り、或は相昇りて踏む。城郭・倉庫・門・櫓

・牆・壁は頽れ落ち、顛覆するもその数を知らず。海は嘯きて哮吼し、その聲は雷霆の似し。驚きて濤は涌潮し、洊徊して漲ぎること長し。忽ち城下に至り、海を去ること数千百里、浩々としてその涯俟を辨ぜず。原野・道路は惣じて滄溟となり、乗船するに遑あらず、山を昇るに及び難く、溺死せし者千ばかり。資産・苗稼は殆んど子遺無し。

## 三、読後感

当時の有様・惨状が先日テレビで見たものと寸分も変わりないことに驚きました。ことに川を遡上して家をなぎ倒し、人を飲み込んでいく様子や船に逃れたり山に登って逃れること が出来なかつたこと、遡上する津波は海から数千里も、やって来て、その境がわからない。溺死する者 千ばかりとある。

## 四、「千ばかり」について

奈良時代の人口は六〇〇万人と教科書にありましたので、貞観十一年（八六九）の人口を仮に一億人と仮定すると、当時の千人は二万人くらいに推定されますね。ほぼ今日と同じような惨状であったのではなからうか。

## 五、意訳

廿六日癸未。陸奥国の地は大きく震動し、水波に映る月

光は昼の如く照つたり隠れたりしている。しばらくすると人民は大声で叫ぶが、倒れ伏して起き上がる

ことが出来ない。或る者は家屋が仆れて死し、或る者は地が裂けて埋もれ、馬や牛は駭いて奔り回り、中には互いに踏みあい重なり合っている。城郭や倉庫、門や櫓、塙や壁は頽れ落ち、顛覆するものその数知れず。海は猛獣のように吼えたり、その聲は雷霆のようだ。驚いて濤は潮を涌き出して、川を長く溯つて上流まで漲り、忽ち城下にまで至った。その距離は海から数千百里に及び、大水が広がり、そのため陸地と海との境を見分けることが出来ない。原野や道路はすべて青海原と化してしまった。船に乗り込むも、山に昇ることも出来ず、溺死した者は千人くらい。資産や苗稼の残りは無くなってしまった。

※数千百里 他の文には数十百里と記してある。

当時の1里＝540mとして百里＝54km

古代特有の大袈裟な表現とは思ふが如何？

資産や苗稼＝生活の元手＝いわば現今のライフラインか。

六、感想 遠く上流まで河川を遡上した津波の様子が、今回と同様に恐ろしく感じた。

### 七、語彙解説

流光	りゆうこう	水波に流れゆく月光
映を隠す	かく	映えたり隠れたり
頃之	けいし	しばらくすると
叫呼	きょうこ	大声で叫ぶ
哮吼	たけほえ	猛獣のように哮り吼るさま
雷霆	らい	雷
涌潮	ようちゆう	潮を涌きたてる
溯洄	さかのぼ	川の流れを溯る
浩浩	がう	大水の広大な様
涯俟を辨ぜず	べん	陸と海の境がわからない
滄溟	そうめい	青海原
千許	せんばかり	千人くらい
苗稼	びょうか	苗や稼
子遺無し	な	残りや余りが無い

### 八、陸奥国府

仙台 名取川と広瀬川の合流地点 郡山遺跡

宮城県北部大崎平野 江合川の南岸 名生館遺跡

が注目されている。このあたりが、大化の改新頃から、724年に多賀城創建されるまでの間、陸奥国の中心的存在であった。

九、多賀城（宮城県多賀城市）、初置年代は諸説あるが奈良時代

には陸奥国府及び鎮守府が置かれ蝦夷地経営の拠点となつた。平安時代には延暦二十二年（八〇二）に坂上田村麻呂が鎮守府を胆沢城（岩手県水沢市）に移した後は国府のみとなつた。仙台平野の北端に位置し、土塁の一部が残っていて多賀城碑が立っている。

### 一〇、貞観地震と貞観津波

本震 発生日 八六九年七月九日（貞観11年5月26日）

規模 マグニチュード（M） 8.3 ～ 8.6

被害 死傷者数 死者約一〇〇〇人

貞観地震（じょうがんじしん）は、貞観11年5月26日（ユリウス暦八六九年七月九日、グレゴリオ暦換算七月一三日）に、陸奥国東方の海底を震源として発生した巨大地震。地震の規模は少なくともM8.3以上であったと推定されている。現在の地名では、東北地方の東の三陸沖と呼ばれる海域にある太平洋の海底が震源とされ、地震に伴う津波の被害も甚大であったことが知られている。約数十・百年ごとに起こる三陸沖地震に含まれるという考えから貞観三陸地震、上述の津波被害の観点から貞観津波ともいわれる。二〇一一年（平成二十三年）三月一日に発生した東北地方太平洋沖地震との類似点が指摘されている。